



13
3416
40

八編下五巻之角

五

松野

勝平院

南總里見八犬傳第八輯卷之八下套

東都 曲亭主人編次

第九十回

司馬濱小船虫淫を齧く
閻羅殿小牛鬼賊を辟く

話表賊婦船虫に去歳の夏越後中て大川莊小義任小酒顛二們が撃き、折獨媪内を伴々遠く武藏へ逃来の豊嶋郡司馬濱小程近き谷山の頭ある人の白屋を購求ゆく才は際と谷まより、軀媪内と夫婦ありて生活も甚虚と半年許わける程不義の貯禄も竭くせ術をか苦み随ふ夫婦竊小商量七又大悪吏と計較け。是より七船虫十字街妓は打扮て夜毎濱邊小立の客と掖発與のまむその懐小東西を構合の折唇をまき舌と噬断と殺るく尸骸と海小棄る媪内の妓有小き初よりその邊に在り。尚及はるものわれ。

八犬傳八輯卷八下

文叢堂藏

過り多し折細引釣漁る浦人們小輪回心教の理りを可寧小説論してとく冥福と
 薦めあり六浦人們月毎小錢を集め年と歴く。竟小二座の佛堂を濱邊小建上立志
 する。地藏と閻魔と一佛二體慈愛肅殺異をもとも俱は能化の教主あり。世小罪障
 冥加のの元と墮獄の苦あり。閻魔の廳は呵責を受く。水劫浮む瀬あり。又
 舊惡あり。先非を怕む懺悔し。心と慈善と轉せ。一旦地獄小墮るとも。やも地藏
 井小救まき。竟小天堂の快樂あり。些小之とも惡事とせ。小惡も稍蘊ま。大惡と
 ありて免る路を。些小之とも善事と忘りて。小善の良積と大善とあり。果報
 あり。然地獄の天堂も。閻魔も地獄も。皆その心の致し。呀とて他小求む。く
 くるその心小求ま。佛とあり。餓鬼とあり。人世小釣漁と做す。ものの宮戸河多濱成弟兄
 近入淀は弥陀二郎あり。ある佛意小愜ふ。の毎日小江河に網を卸し。放生の罪消滅を
 足し。暇あり。の口小佛名の唱易かり。這幾と忘ま。與小と。那上人の説薦め。建

三三三佛堂あり。誰う疎齒小多。死然ると船虫と堀内の。一毫の忌憚り。地方も
 わん。西佛堂の間。主在。客を引く。邪淫。汚穢。まのま。人を害して財を奪ふ。
 罪惡。越小極。其も戰世の癖。を法度邊鄙。小傷。を神と怒り。佛も愛ふ。
 惡報。那身。及。天道も亦賞罰。私あり。同話。休題。折。彼此の社
 伎の廿日。正月。れ。漁戸。農家の。坊。賈。小使。年期。未滿。の小。厮。を遊。ぶ。
 旨。たる。日。然。でも。調。戲。を。嫖。蕩。子の。那。十字。街。妓。を。挑。んと。来。り。狎。つ。木。兔。圍。の。
 木。兔。引。る。物。狂。く。前。顧。執。頼。單。あり。前後。を。争。ふ。鎗。頭。尖。く。突。入。る。客。出。る。客。
 連。放。菟。る。鐵。炮。の。た。り。の。飛。ぐ。天。外。小。登。綱。を。復。の。夜。を。果。敢。り。契。る。草。の。床。草。の。
 枕。小。草。薙。片。布。袖。小。移。香。の。牛。の。糞。を。人。の。心。を。憎。む。ね。敵。ひ。鹿。麝。香。の。臍。
 樞。錢。と。二。百。卻。舎。く。別。と。り。這。全。盛。の。甲。夜。過。く。人。迹。稀。小。奇。比。連。立。未。ぬ。る。近。
 村。の。者。長。農。圃。保。甲。齡。の。四。十。と。い。傳。ひ。鼈。張。燈。を。引。提。る。ち。譚。ひ。の。近。は。を。

船虫やよと喚きし。喃々刀祢達よきを寄せんと招けども此の阿容む立寄る是か
 那評判高き妖虫多敷と共侶は張燈抗く船虫の真容半面はくくと観るは約莫
 半响許感の勝る面色はく。錫右衛門主妙を乃者世間の評判を耳に聆けども
 月々の初く往還の人の情慾を商ふ十字街妓の現罕多は花の顔月の眉可惜縹
 致をのちる。恚非類を世渡りの什生多人の果をんといふ領く錫右衛門はかへり
 多し。嗟嘆七帳八翫の耳目を浮世の果の小町ゆく大雨の溜み金魚あり塵塚中も
 生ける美人草すれむ近屬交の噂も夕浪速津の片頭は夜々十字街妓の
 中へ一個の美婦人あり。その何処なるをせん火計ののまら知る能く昔栗の中へ眞
 玉をく。嫖客連袂ひまを。その美人をの挑む約十夜許も。竟は来む
 多のゆるる。跡も遺せ。歌わりの端も寫着るを知るも知らぬ立寄るは。わ
 世の愛のうたの草のむらふ濡る夜を。とありけは人皆笑憐む。

甚厭多人の身とあり。七恚形は行とあるは。惜かものごと。語絶さ
 然も。話柄の做せし。遮莫世の信る奇談好事家流の作設けり。人を吐き
 多。六箇言あると。方僅這妖虫を。知りぬ。浪速津を。美婦人の。二十四
 孔一孔を。換へ。情慾を。賣り。この。這情。この。ぬ。孰め。掘出東西。嗚呼。廉
 かの。廉。けり。と。船虫。推林。か。と。喃々。祢達。空。口。利。廊。前。を。塞。げ。ぬ。そ
 延。戸。が。塩。焼。き。辛。世。方。金。の。東。西。の。時。價。を。外。短。着。銭。の。入。は。信。ま。ぐ
 客の。馬。ゆ。も。然。もう。ち。全。の。て。い。で。風。味。を。知。る。徒。空。賞。の。傷。む。と。も。
 安。の。の。ぞ。の。多。の。選。代。は。誘。の。尚。用。口。は。か。の。の。軀。の。帳。の。袖。を。抗。て。引。寄
 ま。俱。小。駭。く。錫。右。衛。門。細。箆。の。係。り。支。鳥。を。資。け。く。雲。時。打。擇。を。鏡。と。し。
 両。声。の。身。と。脱。と。前。引。く。鏡。頭。巾。も。片。髻。と。や。袖。を。抛。放。り。卻。舎。小。張。燈。揮
 滅。七。點。を。還。る。素。見。客。卒。罷。下。子。泣。らん。その。子。の。母。も。俟。らん。ぞ。急。ぎ。先。先。

立の地蔵の玉の錫右門閻魔の夢と帳八の障土の地獄小怖氣はく煩惱醒て喜
 提心南無阿彌陀佛と念の御堂遙小拜とて真如の月へま出ぬ甲夜周る来
 熟る路を空めくいそ然り。船虫本意をいふ要時其方を目送り。噫樹の夕さ
 翁們が羊中の蓋せ空口惜さ。四訓の觀面灯を喪ひ。周路を辿る鈍ま。是
 か来ぬ。実小成る客且焼着く俣と獨言の彼此と塩木拾ひ。燃残る火を吹
 起も浦風の寒さを凌ぐ程のぬれ野幸の鐘の音响く。夜へま二更ゆきあけ。登時
 船虫のやう。今宵も既深初ま。阿定の多錢の合と揮ふ采は薄情さ。然るも
 野良夫が今も何首小をせん夜を上月ま世渡りを知り。這里へ寄着ぬ外増花
 わりての然然と路の障り。留まらざり。心はく。俣不樂や。と
 苦に胸小之焼や塩木の薄煙立秋と今も滅く。空吹く風小雲齋。二十日の月へ
 出ぬ。浩処小高懸の。下り来。一個の旅客宿投後。いそ然り。人肩小二箇の

行裏と前と後へら振く。走り過る。程は船虫や立迎へ。や喃要時寄る。ぬ
 ねと喚く裏包と披留ま。旅客駭く。あつて。あつて。理不盡。何れぞ夜にの濱邊不
 憚りも。殊小女子の單身。旅客を月を。御田宿引多。然然あつて。あつて。船虫
 うち笑ひく。疎函多。を宜且か。いと恥く。はく。奴家が。良人の武家の退糧人。這近
 御は僑居。挽お立る朝夕の烟も。知る身の病着。臥と一稔。あつて。あつて。世を去り
 竹の迹。残る老。姑。三稔。以来。臂足疾。目も亦。あつて。あつて。六葉の價。術を多
 親小隠。七宵。毎小。這塩濱。小。情。怨。を。賣。親の。與。憐。敗。多。や。喃。と。説。く。を
 う。旅。客。の。隈。あ。け。月。光。小。定。小。趣。あ。る。色。三。香。三。憎。く。ぬ。あ。未。曾。有。の
 夜の花然。も。此。小。の。價。也。身。を。儘。せん。と。當。目。翫。せ。ま。王。の。山。小。入。の。空。小。還。る。小。似
 一。方。と。尋。思。を。ま。ん。亮。介。と。笑。く。原。來。稀。る。孝。行。實。義。剛。才。の。情。由。を。買。て
 一。つ。六。情。も。慈。悲。も。知。ぬ。夷。狄。と。い。ふ。假。寝。の。臥。簾。へ。何。処。を。と。問。ふ。船。虫。笑。い。け。

倍々俺與よきと大々あるさへ憑りたる限りもあつて廿日正月ゆく人も
 俺のさへ皆遊ぶを上司とあるふより牛中の骨を休して咱們夫婦の日の暮るまじ
 酒うち喫う樂盡く不圖せし口説のめより。殴り罵る送の醉狂多む四鄰を騷
 考る緯の紛ま盗児が背門より牛を牽かひ緯鎮と俺牛鬼のわむ多しと
 稍知りてさて起鬼本らるるを勿論這里まで路をう人々同試ふれ甲夜
 肩より比より炬の點さく牛を牽く一個の男の慌げし司馬濱のくさぬれと見
 きこのめの言なりける甲夜より這里のま和女郎の足とひく胡論と詰ると船虫
 冷々大ひく。その言まるとあり。猫飲鼠であらふ目小拭さるるありん最大さる牛の
 牽まると這頭へ来るとん詭う目外へはる死司馬といふ廣かる這里の濱で
 ちんや上中下と幾町う長き浦曲を彼此とよも涉獵らでちん牛の必這里へ
 来るとの夢でもんを夢の奴家の牛の張番人の央まるとのめを鈍まると

よと口ろく。窘らむと鬼四郎の腹も立まむ舌うち鳴りて恸いさるる樹もた。ま
 又外を涉獵る。益をかりと吐き。帰まんとせ。程那牛鬼の這年来听も熟
 たる主人の声を知りけん高泉屋の内より。忽地高く叫と鳴く。声小駭く鬼四郎
 其方を佐とんかへ。俱小驚く船虫の折万かり。と氣を胸く。妻く胸を鎮めども
 糸鎮らぬ牛鬼の兩三度鳴く声の疑へる。あつて。おん。鬼四郎他ら
 正しく俺牛之那首小隠と措き。悍々も欺きて。這術妻奴も耦賊を先
 牛鬼とせ。ま。虚實を舛え。覚期をせ。と敦圍猛く高泉屋の戸口へ寄るを
 船虫推禁る。漫るる。ま。他に這頭の浦人が塩木と駝まる牛を。夜那
 菰屋小敷茶びきわ。司馬の言か。おん。牛の鳴るのえ。いせ。おん。鬼
 四郎の怒る声を。立て。這賊婦奴が大胆。這期小及び。ま。云云と偽るとも
 詭え听ん。おん。ま。再找む高泉屋の板戸を推



八代傳八景卷八下

十二
○文安堂藏



鬼四郎牛鬼

目前地獄のまのぢま
二兇就戮

八代傳八景卷八下

○文安堂藏

媼内を之と稱々と細めて地上不礙と蹴落してその身も其首も下立り小文吾の對面を浩
 處の莊介現八大角の三天士小文吾が歩のまゝ歩むも遠く後とぞ。稍這処来りけし
 小文吾やと喚聚合々却船虫媼内を生拘り輝の顛末并小信乃と道節の資助を以
 たるのまゝも箇様々々と説示其莊介現八大角の所々齊一駭嘆して信乃道節の對面
 俱れ歎ひて演て又の事。某們的犬田と俱小箇様々々の哀あり。大法師の迹を慕く。指
 月院を叩く。殊々路次をいそぐ。昨夜も八王寺宿を扱め今朝も未明に立出て石原
 驛まで來り折後小人の相譚を声して四分の三の益命。矢口より高嶮を投ぐ司馬
 濱小赴る宜かんといひけし。俺們四名皆々皆々俱れ後方より分つ小迹より來り人の
 たり。若是神の示すの十字とらる。路の遠きを厭ふとぞ。矢口を來て日の
 暮となり。非如夜半の及ぶもの。德北に到ん。剛才這浦まで來り程小犬田の素より速
 行なり。連小先を走りかひ小怨を累り。這賊婦を生拘りたる。とぞ。料ども西賢兄の

資助より七媼内の銃向を脱き。石原驛より前兆虚かむと云き。寔に愛
 せし。俱れ祝七已すけし。小文吾然と云ら合分々。俺們が這濱邊來り右小
 如く。犬塚大山賢兄達の這果在り。いづく音も向小の義を向ひか。あをるる
 暇なり。何等の故の事。と。道節声を低めてその疑ひある。説之。某の犬塚と俱れ約
 束のあり。這里を人を俵に。と。秘密のゆる。後中を扱ま。めれりも端的
 忽諸小去る。這個牝牡の二賊之這奴們が人を殺す。と。犬塚も窺見け。その崖を諸君
 子小教知。ぬねと。信乃の領。大田犬川大飼大村四位の弟兄。听受各々。這賊婦小
 欺する。わら。然。毒悪の趣も詳。其の象。知。所。あり。船虫去歲の夏その
 良人酒顛。二の犬川生小撃。と。折支黨の兇賊媼内。と。共侶。越後の隱宅。逃亡。る
 その煙の趣。曩の犬飼大村。大法師。受。う。と。ぬ。比。の消息。某們。を。知。り
 焦而船虫媼内。速く。這地。脱。來。て。夫婦。做。り。西。度。と。旨。と。そ。の。趣。と。箇。様。々。

毒惡類言かぬと怕るもの所以なる憐むとも情や致無慙の癖者けり。と責
 る信乃の推禁やく這期か及び議論の要多。媼内（四ノ原）の原中主の淡雪奈西郎不
 痠を肩し盤纏を奪ふと逃亡する昔悪の信乃の罪船虫と勝劣の免の推並
 ぐ八創か斬切き悪懲入今猶豫するもの道節領にそ勿論多
 畜生のもの劣りたる這奴們を主君子の小掛可惜刃刃と汚牛刀を鶴を割く如く
 ろん牛と媼内を竊み牛の那首わり他與も這奴們の亦是主の仇食牛小突
 き多の隨小苦也誅戮せん箇様々小果多と諭小文吾現八廿壯介多る下と心
 小刀小附る小刀子と船虫と媼内衣の背條を破破信乃の亦小傳小文吾と
 共侶小墨筆の筆と這賊夫婦の背へ罪の箇條とせ約書小寫着く閻魔堂の
 權前多二株の杉へ推並旋毛纏小巻りけ登時道節大角を誘引く菓屋隠
 置置る牛と這奴又奉とせけの介程小船虫九（罪過）を小文吾大角們と

怨にて罵り存のくも既死刑小甚きと哀果只媼内を力かると又媼内
 道節小太く枝らむ時胸を撲せ骨を折せ声立（一）半句ものい面色（二）と
 才小息を吻せ道節こと左見右見て五大（三）の弟兄（四）と這船虫媼内尋常の
 罪人（五）をその悪古今小稀多身生多（六）地獄（七）の墮（八）今這閻王殿前小牛の角小
 壁（九）前（十）回（十一）地（十二）藏（十三）わ（十四）り（十五）の（十六）も（十七）救（十八）ふ（十九）と（二十）大（二十一）辟（二十二）の（二十三）謝（二十四）断（二十五）恚（二十六）を（二十七）あ（二十八）げ（二十九）と（三十）信（三十一）乃（三十二）牛（三十三）の
 身（三十四）邊（三十五）小（三十六）找（三十七）寄（三十八）の（三十九）は（四十）く（四十一）見（四十二）く（四十三）御（四十四）留（四十五）ま（四十六）這（四十七）牛（四十八）の（四十九）主（五十）と（五十一）鬼（五十二）四（五十三）郎（五十四）云（五十五）と（五十六）誇（五十七）り（五十八）也（五十九）初（六十）と
 知（六十一）り（六十二）ぬ（六十三）お（六十四）と（六十五）収（六十六）逸（六十七）物（六十八）を（六十九）村（七十）人（七十一）們（七十二）が（七十三）ま（七十四）な（七十五）を（七十六）搭（七十七）と（七十八）牛（七十九）鬼（八十）と（八十一）喚（八十二）做（八十三）け（八十四）も（八十五）名（八十六）詮（八十七）自（八十八）性（八十九）
 牛頭馬頭冥府の獄卒小擬志りけ自然の妙契畜生とのあつわ（九十）這（九十一）義（九十二）を（九十三）あ（九十四）て（九十五）主（九十六）の
 仇多賊夫賊婦を辱けか心をなと叮嚀小諭せ小文吾現八牛の後小立りて
 の七尻と破と拍の拍と勇む牛鬼へのい媼内と船虫を仇と現へる程もわも那をも
 這も長尖まる角のと腋下より肩尖まで串貫辱く怒牛の勢ひ地獄の呵責を目前小

受く苦し船虫楯内眼血走る顔の色赤く又蒼く多て腹小波うの大叫喚申るに
數番おとす息絶し有繫る勇む六太士も這光景は肅然と息も目を合けり。

第九十一回 谷山小道節定正を射る

登時小文吾六信乃道節們が対ひて某小千谷小旅宿を去る。去歳の四月二十村を
闘牛の折暴牛ゆり。その夜小角力磯九郎の船虫酒顛二不殺さる。今宵亦這赤牛が
船虫楯内を劈き主の死を復す。那磯九郎の與り恥を雪るの似ず。天網疎漏
さる悪報かそのひきよ。道節點頭其頭の餘談もまかを緊要を密議わ
約束する快船の今来の死比多牛と樹下小繫留也。一圓這里を退くべし。答る詞の
訖らぬ折る波濤を推断る快船一艘。這塩濱小漕着て暗蹄の哨子と吹鳴共道節信
乃のあつて走り水際小赴く程小船前小找む。是則別人を走落船餘之七

有種之道節信乃が對ひて。御高小示さるの如く某總北小走かた之豫一味の衆人
よと告相促し。速小準備と教共這義と知らる。其の快船小乗走して
目今着到致さ。又衆人五六艘の大平舵小執乘て推續きて來り。該しこの道節教ひて
その速多隊配之某の大塚と俱に黄昏より這里小寄。専來船と俟程小料も小文吾
莊介現八大角の四大士が甲斐文の石禾より來つ。不遭おは有信ひく便より。那人々對面
去更及び進退之議定げ。この信乃も有種主僕と管高師們を旁ひけり。小程小莊介
現八小文吾大角の牛と樹下小繫留を連し來り。信乃道節は這四大士小
有種が來りけり。と信乃と教知し。齊一船小乗り。高嶺の之漕せけり。登時莊介
小文吾現八大角と共侶有種小初對面して。大法師の迹と慕ふ。甲斐文より這里
志來ゆ折道節信乃の資を得。強盜船虫楯内を誅戮する趣と箇様々を教
知る。有種耳を傾けり。手初よりを壽言け。且て道節小文吾と自餘の三大士小

う対ひ声と潜めて其が大塚と共小塩濱多堂内小うち籠りて在りける。其のうち
 必まげん言脩とも初より詳小物とらん其け小料も湯嶋の天神の社頭と大塚野の
 邂逅あり。他の縁で少小似も額髪を剃落し坐敷師物四郎と假名し。疣黒子を
 除く薬と磨名齒砂を賣るとのヨク人との聚合せり。傷小人のあそび七名告る小暇多り
 志かども大阪多しと猜せ小人相手相と論破りてその才学を試し小名も倍言辯論
 奇才某們及ぶ所小わむ既小と某と相と大望あつとと亮查せりも亦奇なる也も
 便り小知りけり果敢多其首と立別ま。かるとうせり潜り取て返とそ頭多。皮
 林の中伏隠ま。その容子の便宜の密談を交りうその故の箇様々々と
 百堀卿云愁訴の奥小越後より来て湯嶋にて毛野小掌相を問ひる。その小より次
 團太が淫婦奸夫小誣りて片貝の獄舎小繋系まるとの癖の趣木天蓼丸の短刀の
 る鳴呼善士丈二小伎倆ま詳小知りて折蟹目前の社参のゆその龍愛の猴の

毛野が食入るまの功とて次團太と救と請け小縛立地小允さして卿
 二蟹目前の使者次通小相俱と越後か。去る任河鯉守如小頼小毛野の武
 藝を試し其の朝用小縁連を撃せを謀りて。那縁連の三槍以来定正小仕重
 用せり。今番相摸の北條家使者とと赴る。その奸險の行状ま。折具小夢
 毛野の教小意外小安。那縁連の年来索る小仇多。その身の素生
 實名ま守如小告知せり。且と製入とて遠く立別ま。そのも聞見隨小説示其
 小文吾莊小自餘の黨のま。遇見は現八大角有種小推並毛野が孝感天助を
 得。面を認め寛家の所在を詳小知る。多るを撃捕便具小値ひける。齊一感る
 多。小文吾と莊小。那次團太の横難毛野が微妙く救ひも復は。其の
 けり。登時道節又い。既小諸君小知の事如。小相谷定正の俺昔君の仇多。其
 星裏小白井の效外と。撃果と。小還敵小謀りて。その縛成ら。今小至り

去歲の玖月より穂北の旅宿ありて五十子の城内を覗き便りて越水
 復讐の密議と大塚落船の示す是と非を問試み大塚の議否と
 竊に謀らば然として已むるも密々那城の頭近死幾番。虚実を
 まく密々かもの便りて守如の密議を密々那城の頭近死幾番。虚実を
 復讐の粹の趣五十子の城内へ密々定正必刃勢と中七毛野を敷きんとせし
 べ。その虚不乘りて短兵急那城を攻破らば唾と定正の首を捕まると易かりん
 日裏小豊嶋の殘兵の落船生れ從多穂北の民も一の無慮九十餘名あり。這精
 兵三十名を分ちて大阪の援不倣ま。その餘は備隊不從へ。便寫の処伏躲と一舉の
 城を攻破らんと尋思と多穂北の宿の前路折の上野の原の頭と大塚生れ有
 種子と俱に來ぬ不遭ひ必絆恸々と其と生口準備の與有種と穂北の宿所へ
 遣。某大塚と共に司馬濱不赴きて落船生れ約束佛堂の頭不冬より寒池

初春の浦寂し黄昏小疾潮風の場々ひき堂不脱と其へ扇魔堂未閉籠り大
 塚の地藏堂不籠りて躬方の船を俵。料も賊婦船虫悪僕媪内を誅戮と大田大川
 大飼犬村四個の同盟石木より來り不遭ひ錦の上の花と漆る幸ひと一五十一と説
 示共齊一勇む小文吾井介現八も大角の俱不贊嘆の声を断すを隊配の速身を
 稱有種と旁及びの當下信乃の壯介の四大士うち對ひて今大山の如く某の初
 より復讐の議を諾む縦大山の舊君の忠ありとも大敵の當りて戦及倣とある里
 見殿不對まつて不義多。大山の所せ七輝を及及び其今義の與不
 性命を惜む只大山の力を易と肩合定正主と敵と大父三成嘉吉の怨を復さむと
 多のの然るるに大那大阪助大刀。智智萬夫の勇ありともを寛家縁連同
 行の勇士三四名伴當通く百餘名及及と一臂の力不殺彈さ有恠先
 某の毛野を接けん五十子攻を先と難く胸中區々けり幸ふと石木

退きせしむる敵の退き輝の難義及及びその折中を大飼も大村生も隊兵を
 找せ戦と接け然るも其毛野も恨もせ輝十分の十多る危殆を多るべと議事を
 表のうんげん。その計議の極め妙之胤智の面識より大田大川二君子の就中
 大田生石濱より七好も深かり進退の左も右も大川生と商量を交又大山が五十子
 攻の要の時宜し憑るべき今這里も定むるが軍議の是も多るべと道節小
 文吾現八大角有種們も俱ふ心も亦復餘談不及及びけり。介程道節有種が
 伴當二名の要時機密を具し示し七汝達五十子の城の頭も潜りて縁連們が城
 より智と見定めて信乃の処も快走りかて大川大田も報知ぬ這他のるの箇様を
 との余伴當們のありて船と浦曲小寄りの高嶽より登り七五十子と投るに於て且七
 有種準備の割筆をうち披き六六士も夜飯を羞め蓋を薦めを多船と司馬浦
 潜り程も現八大角の在介小文吾と送代小石木も存り程の信乃道節も報

知七指月の道場の後住の入院の下旬多るべと信乃其某們の間の葦生山へ赴けり
 条件の時日嵩齡ひ才の中一日の七後住の老僧入院を告げ、大法師の某們のかつ
 来宿と候小及む且穂北も退んを石木と立去るのを某們のを知りども只何と
 多し心もそのせれより路草の嘆の那寺も喜より小輝信々と候多し船と石木を
 辞し去り七道徳の迹を慕ひ夜を日小燃てまの道徳の今も穂北の宿も留りて言
 書を伏と向と訝る信乃道節の俱も眉根をう頻りてをあるのぬと云か。昨日は
 けなまの、大法師の来宿も首耗のゆゑに今其某們の四六沈吟七多るべ
 ひどりやていそ。ゆきかむ。道徳の去向を急ぎ結城へ赴けりけり故の箇様々々と里見殿の奉為の今番結城の
 古戦場の廬を締めて一百日の大念佛を修行七大炊殿を初と七大塚二成井直
 秀這他の當日陣歿の士卒の菩提を吊んとしとて報知まを信乃道節有種們
 まを感と大と多るむを肆月の祥月忌必那里も赴きてその法延小會とて皆憑り

知るべき事ほど却るべき事ほど近き村長よりと報て地方の民と共に侶小の詰旦五十子の
 城内へ訴けり。去る所小の目城外小の目沙汰不及と第三日小至り有司詮議し小舟虫
 と堀内が首級と濱邊小斬鼻け。輝遠近小ゆえは人咸駭嘆せざる。強盗夫婦と
 細めてその積悪を任々と背負の人の脚堂多。闇魔王の雷駭ふとあつてと参詣
 羣集をり。小介後數度の戦ひ小堂。テ額破皮及び地蔵の闇魔王の木像も其木甲
 寺の遷りて。這里のあつてと又鬼四郎が赤牛の強盗夫婦と突殺する大功あり
 の事とて鬼四郎が妻と見子のいふまゝと鐘愛せし者一周忌の善提の與小
 と香華院のあつて。是より七那牛の耕作車力の艱苦もわづらふ歳々寺の奉養も
 選佛場中終り。是足等の後のる事と約て其小寫の休題再説明は正月廿日
 這朝五十子の城内小竜山免太夫縁連。相模多北條家へ密議の使節と
 奉り七未明より首途と縁連の目打扮の萌葱威の身甲小磨着の腕甲膺看しく上

衣虫黒蛇皮絹の小袖小塔吃の衣二より龍被て黄羅紗の陣羽織小純子の野袴を穿
 領。其黄金表装の両刀と瑞脩小踏。桃花馬の太逞に雲珠鞍置て來る。左右小
 従ふ四個の若黨雜兵奴隸三十餘名前小立後小跟。鎗柳管長柄の傘。鎧櫃杖雨衣
 と次第と亂し。隨從も次小副使電門既濟越杉一本。鯉崎猛虎仁田山晋五小立
 志俱小少らぬ打扮也。各々馬と拍せる。這伴當の許りて小荷駝を牽。長櫃と昇りの
 遙後方小従ふ二町有餘陸續。既小縁連の稍品草とち過。朝日初。日升る比
 鈴森林の波打際と運進とて徐行く程。前面の茂林の樹蔭より顯る。一個の壯士。是則別
 人。大。大阪毛野胤智之胤智。這目打扮。百布の四天の下。細鏢の細衣。被て重垂早の立
 擧の膺盾。小白布の顛。統と髪を後。振。糸。一。二。八。寸の白大刀。小。首。帶。副。小。鏡。引。提
 去向の方小立。塞りて。天地小響。音。高。勢。小。竜山免太夫。本姓。小。龍山氏。逸。東。太。縁
 連。且。駐。を。往。實。正。年。の。冬。十。月。杉。門。の。里。の。這。方。小。汝。が。為。小。駭。れ。る。粟。飯。原。首。胤。度。が



八天傳八陣卷下

九三
○大敵討つ身は



八天傳八陣卷下

○大敵討つ身は

遺腹の第二の男子大坂毛野胤智あわりの俱天と戴る然の銃丸受ても見えと名
告の果を鐵炮を食直推向て火甚とて控と放其電錯と縁連の馬の胸骨駁と摧
之馬へ屏風を倒さ如く矢庭を撲地と轉輾六王の杯を燈の外七俱小地上倒と毛
野へ得すと鐵炮投棄大刀と真額小技駁射七飛が似ふ走掛と縁連が四個の若黨
送小王を敷せと推隔技連と防戦ふ刃の電光朝日映と眼と射ととも勇毛野の
物ともせ人境境入る如く當る儘と破倒共二人の首と駁落と殘るも深痕小
堪がけ跌輾びて息絶け有恁一程縁連は稍身を起と四下と方々鎗奴が棄て
逃るその身の短鎗あひけと掻合りの扱とて足場を探りて田圃の二町をり退くと毛
野へももるをてと縁連逃ると何首も脱えと蓬返せと吸掛と草薙地を趕と
け。這回も長とるれと母巻紙數未定限の縁連が末期の光景并大山道節が復
讎言志寫りたり是より下の話説へ又編を接た巻と更九輯の用ひの解分ると聴ねか

因小云大村大角の名の禮儀と第六輯の見えと論論然る第七輯の禮度小作り
古入字訓の多たると則清と憲清儀清小作り時致と時宗小作り成氏を重氏小
作り例のね深と各ふ足とるとも実の暗記の失とて本輯中改正と又禮儀小
作り抑第七輯上下二帙の刊行の書肆先例の背と作者の校訂を受て制本發
行せりとの就中誤寫より又只七輯のまわると毎輯書肆小發販を急れて校訂
夜と目接とる不見送と誤寫行脱とるを以て其具眼の君子正
又云信乃莊介道節現小文吾大角毛野這と大士の列傳の既との趣と盡と獨大江親兵衛
の義勇と創と小由多の第四輯と世の時四歳の童と第九輯大江の為小
立る脚色と七列小女
形牡丹花小似ると第九輯と至之分解と全書の團圓近とわりの看官結局の目と俟ねり
里見八犬傳第八輯卷之八下套終

○著作堂手集南總里見八犬傳第八輯下快画者筆工刷人目次

出像畫工

柳川重信

做書 五六七八上 五附録八下 墨田金 仙橋

副 第六卷 第六卷 第六卷 第六卷 第六卷 第六卷 第六卷 第六卷 第六卷 第六卷

第八卷上 第八卷下 田原喜 木喜 藤吉 守八

開卷驚奇俠客傳第二集 第二集 本集五冊 當癸巳春より賣出

紀北トク 第三集 本集五冊 共小精刊美糸製本

近世説美少年録第四輯 本集五冊 後編三冊 後編七冊 共全十卷

松浦佐用媛石魂録 戲曲小わりの事なる駒才三つを奇妙に作りまける因果物語なり 全五冊

美濃舊衣八丈綺談 本輯一部全壁と多しと接續刊行近き小なり 卷數未詳

南總里見八犬傳第九輯 本輯一部全壁と多しと接續刊行近き小なり 卷數未詳

本房刊行す呀 曲亭翁新著美少年録俠客傳并八犬傳第八輯共八良工と擇と雕鏤す所なり 此の如きものありは精細と加えて遺憾なく 考へて八犬傳第九輯も續刊近きものあり 既に上の目録にも見えし七輯以上の動もれは邊滞を するにあらざれば伏して原も賜願の君子美糸微とを 吹かすこととを 江戸書林 文漢堂故白

○古今分類の仙女香 四十八文 黒油美玄香 四十八文 江戸京橋南二丁目東側角坂本氏

天保四年癸巳春正月吉日發行

大坂 心齋橋筋 博勞町

書行

江戸 本所松阪町 傳馬町

河内屋長兵衛 河内屋茂兵衛 平林庄五郎 丁子屋平兵衛板

